

通訳案内士試験道場 韓国語で学ぶ日本⑮陶磁器

土器から陶磁器へ

- ①漆にかぶれぬよう漆器を作る技法
- ②土をこねて乾かしたり焼いたりしたこの器は水が漏れ(しみ)やすい土器ではあるが、
- ③竪穴住居にすんでいた時代の土器は、縄をまわして紋様をつけたりもして、
- ④波打つ様子を突起で表現した装飾、器全体を形作るとても手の込んだ装飾など、呪術的な力を感じさせる迫力ある形
- ⑤暖かく明るいふっくらした感じを与える新しい土器
- ⑥質的に劣る縄文土器
- ⑦まるで鉄のように硬い「須恵器」という新しいタイプの素焼き
- ⑧きめ細やかな/さらさらの黒土
- ⑨まるで粘土に触るような手触りを与える日本人好みの器をこつこつと/地道に作り続けてきた

茶道と陶磁器

- ①お触れを出して京都で大茶会を行うほど
- ②顔(面目)をつぶされたと思った秀吉がかんかんに怒ったからだ。
- ③小さな小部屋/納戸のような和室で 飾り気なくあきのこないデザインの陶磁器を使って
- ④茶会においてお点前の前に出てくる食事「懐石」
- ⑤茶道では四季折々、その季節にふさわしい器に料理を盛り付ける。
- ⑥茶会を催す亭主は真心を込めて器を選び、客をもてなす。

窯見学

- ① 外に漏れぬよう村の入口に重々しい/ものものしい雰囲気漂う関所を置き、蟻の這い出る隙間もないよう/水も漏らさぬ警備に神経をとがらせた/慎重を期した。
- ②それほどまで警戒を怠らなかったのに
- ③煙突から真っ黒な煙がもくもく出ている工房
- ④蒸し暑く足の踏み場もないほど道具や材料が置かれている工房は人手不足のようで、陶工たちがあわただしそうに働いていた。
- ⑤「早起きは三文の得」とはいうが、一般的に陶工たちはいわゆる夜型よりも朝型人間がおおい。
- ⑥一旦窯に火を入れると延々13日間は昼も夜も火を焚き続けねばならない。
- ⑦最後の二日間は「残業(夜勤)」という概念もないほどで、一睡もせずにとき口で寝

ずの番をしなければならない。

⑧パチパチいう木が燃える音とゴーツという窯に吸い込まれるような風の音が聞こえる

⑨恐る恐る/気をつけて釜から取り出しても、なかなか思い通りに焼けていない。

⑩生みの親も育ての親も

浅川巧と柳宗悦

①細長くきゃしゃで、そして時には気高くも悲しげで、暖かくもありやわらかくもある線の調和

②十二世紀の開城にきた宋の人は、このような青磁を前にして言葉を失い、ただ「これこそ最も優れた絶品」とため息をつき/感嘆し、それを「高麗の秘められた色」と命名した

③朝鮮総督府傘下の林業試験場の役人として働いた浅川は高麗青磁と朝鮮白磁の美しさに早くから目覚めた民芸研究者でもあった。

④伝統的なたんすや障子の備え付けられた朝鮮家屋で、パジチョゴリをこのんで着て、土鍋の汁にご飯を入れて食べた。

⑤また、ひげをのばし、朝鮮のキセルを使ったりもした。

⑥急性肺炎で息を引き取る直前、

⑦浅川の訃報を聞き、多くの朝鮮人たちが号泣し、

⑧葬列では棺を担ごうと願い（申し）出る人たちだけでも数十名に上った。

⑨浅川と同じタイプ/方向性の人物

⑩光化門撤去を阻止するため、「嗚呼、光化門」という文章を投稿した民芸運動家の第一人者とみなされた柳は、浅川に感化され、アドバイスも受け、朝鮮文化に心から親しんだ。

⑪大量の著書を残した彼は、朝鮮白磁の白い色を「悲哀の美/かなしみを込めた美しさ」と表現したことでよく知られている。

⑫趣味が高じて慶福宮に「朝鮮民族美術館」を設立した。

⑬民族間の融和を図りながらも口先だけの役人たちが大部分だった。

⑭たとえ役人であったといえど、浅川の生き方は新しい日韓関係を作り上げていくきっかけ（手掛かり、糸口）になる。

民芸運動

①パリ万博に彗星のごとく現れた日本の陶磁器が、空前絶後の日本美術ブームを瞬く間に引き起こしたからだ。

②かさばるにもかかわらず日本の陶磁器を買い入れ、宮廷の壁にすき間なく飾るほど愛された/愛でた。

③業界の流れ/主流

④庶民の身近な生活に残っている光/陽の当たらない美に焦点を当てる「民藝運動」

⑤つまらぬものとばかり軽んじられていた陶磁器が、それを契機に「民衆の芸術」として注目を浴びるようになり、かえってプレミア/希少価値が付き始めたのだ。

⑥力はあるながらも日の当たらぬ/評価されぬしがない朝鮮の陶工たちの普段使いの陶磁器を見て、血がたぎる/わくような感動を受けた。

⑦作品性を重んじる考えを変え、77歳で大往生/天寿を全うするまで地味でも/見栄えせずとも目に優しい/見ていて和む実用的な陶磁器を作った。

⑧三冠王として推薦されたが、使う人の手になじむ陶磁器を作ることを誇りとし、それで十分だと思っていたため、断った/辞退したのだ。

陶芸教室

①灯台下暗し

②モチーフをデッサンしてから白磁に描く人、

③大きなかめや壺、徳利、燭台、茶道用の茶碗など、素朴な普段使いの器を作る人

④万事呑み込みが遅いほうなので、初めは慣れない/ぎこちない手つきで土をこねていた。

⑤やればやるほど伸びる/上達するというが、

⑥非対称的なものばかりだ

⑦傷があり、曲がっていて、ゆがんでいるもの、さらにはふちが欠けた物さえも好む

⑧「あばたもえくぼ」という諺通り、陶磁器の表面を肌だとすると、外国人があせもとみるものを、日本人は可愛いそばかすやえくぼとみるのだ。

⑨「出藍の誉れ（分家が本家を追い越した）」というべきか

⑩癖のある陶磁器

⑪古墳の周りに並べられたり、埋められたりした土人形

⑫秦の始皇帝の兵馬俑

⑬脇目もふらず/一心に作品作りに集中すると、少しずつ上達したようで、地区で開かれたアマチュアの展覧会に出展したところ努力賞をもらうまでになった。